

星の停車券 (23) アンドロメダ座

土山 紀子

11月の午後8時に子午線を通過するのは、きょしちょう座、アンドロメダ座、うお座、ちょうこくしつ座の4星座。きょしちょう座は日本から見えず、うお座とちょうこくしつ座は暗い星ばかり。秋の空が寂しい所以ですが、数少ない立つ星座たちがしっかりと話題を提供してくれているのも、秋の星空の奥深さ。

今回は、そんな秋の星座のヒロイン、アンドロメダ姫を象るアンドロメダ座についてご紹介しましょう。

アンドロメダにまつわるエチオピア王家のギリシア神話は、あまりにも有名です。舞臺になるエチオピア(Aethiopia)は、アフリカ北東部にある現在のエチオピアではなく、おそらくアラビア南西部の紅海沿岸か、メソポタミア地方（現在のイラク）、もしくは地中海のレバント海沿岸。美しいアンドロメダ姫は歴代の神話学者たちにも気になる存在だったのか、袿の肌の少女であったとか、雲のように美しい首をしていた等、論議を醸し出してきました。

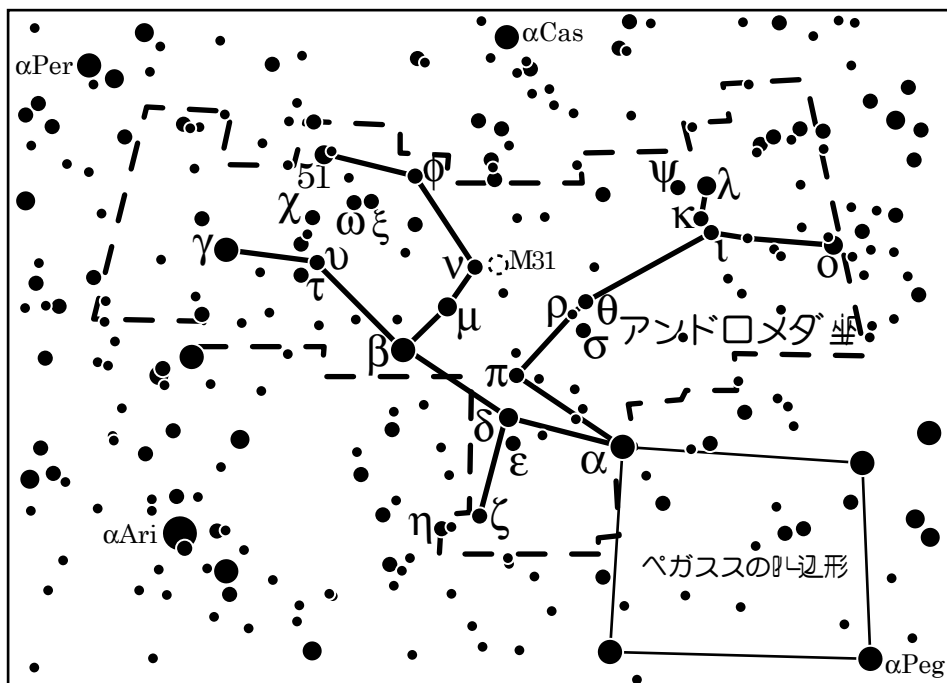
アンドロメダは、エチオピア王ケフェウス（ケフェウス座）と王妃カシオペア（カシオペア座）の一人娘。カシオペアとアンドロメダは美しい母娘で、カシオペアはつい「私の（又は、アンドロメダの）美しさには海のニンフ、ネレイドたちも及ばない」と慢し、ネレイドたちの祖母、海神ポセイドンの怒りをかってしまいます。ポセイドンは三叉の杖を振りかざしてエチオピアの海岸へ津波と化けクジラ（くじら座）を送り、休ったケフェウスに下った神話は、「娘を化けクジラの生け贖に捧げよ」というもの。王であるケフェウスに選択の余地はなく、アンドロメダは海辺の岸場に鎖で繋がれます。そこへ、ゴルゴン三姉妹の一人、メドウサを退治して帰る途の勇士ペルセウス（ペルセウス座）が、天馬ペガサスに乗って通りかかり、アンドロメダとの結婚を条件に化けクジラを倒し、救われたアンドロメダはペルセウスと結婚。これがあらすじです。

このギリシア神話は、バビロニア（現在のイラク南部）のマルドゥク神と竜のティアマトの物語が起源になっていると考えられ、レバントの海岸には、今も化けクジラだった石が残っているとされます。

古代アラビアでは、このあたりに全く異なった幾つかの星座を祀っており、アンドロメダ座・カシオペア座・ペルセウス座にまたがる“牝ラクダ”、ペルセウス座・アンドロメダ座・うお座にまたがる“二匹の魚”、アンドロメダ座・ペガサス座・はくちょう座にかけての“完全な馬”、ペガサス座辺形の“桶”などが知られています。

天文学では、アンドロメダ座からうお座にかけての細長い六角形が28宿の15番目“奎宿”（けいしゆく）で、この六角形は上から見たイノシシの姿、またはサンダルに靴立てられています。秋の空高く昇った奎宿を祀り、人々は靴を履く季節になったことを知ったのだそう。このほか、アンドロメダ座φξωχの“軍南門”（陣營の南門）、γやさんかく座の星々で作られる“天大將軍”（天の大なる將軍）、δθρσの“天馬”（天の馬小島）等、天文学ではこの辺りの空に靴いに関係する星座が置かれていました。

また、キリスト教の時代だった中世ヨーロッパでは、星座を聖書の登場人物に結びつけて語りましたが、アンドロメダ座は旧約聖書サムエル記に出てくるダビデ王の第二の妻で、聡明かつ美しい女性アビガイルでした。



所有名を持つ星はいくつか知られ、まず、2.1等のα星から。

α星はアルフェラツツ又はシラーですが、どちらも“雉のへそ”という意味のアラビア語が語源で、隣のペガサス座のδ星として雉のへそを示していた名残です。混同して“アンドロメダのへそ”と呼んだ人もありました。プトレマイオスの『アルマグスト』によるアル・ラス・アル・マラー・アル・ムサルサラ（鎖に繋がれた女の頭）という、星座の位置にふさわしいアラビア語名もありますが、ほとんど用いられません。♁星術では名譽と裕福の象徴でした。

次に2.1等のβ星、ミラク。語源は“腰”という意味のアラビア語で、同じく星座で腰の位置にあるうしかい座ε、おおぐま座βにも同じ名がついています。♁代アラビアには、バトン・アル・フート（魚の腰）、アル・カルブ・アル・フート（魚の心臓）という名前がありました。これは前述の“二匹の魚”（アラビア星宿第28：アル・フート）の叫での位置によるものです。♁星術では名譽と幸せな結婚をもたらす幸運の星でした。

最も美しい二重星の一つとして、そしてピエラ彗星の落とし子であるアンドロメダ座γ流星群の放射点として有名なγ星(2.2等)は、アルマク。アラビアの小さな肉食動物（ライオンの傍で獲物を執る動物）のことで、もともとは“太陽の子”を示すアラビア語だったということです。

δ星(3.3等)にはデルタというあまり知られていない名前がありますが、これは19世紀のアメリカの天文学家バリットの命名で、語源は「パイアー名から所有化したもの」、R.H.アレンは「δ ε αで作る三角形の形から」と説明しています。

最後に4.9等のε星、アデイル。星座での位置を示す“衣服の裾”を意味するアラビア語が由来です。多くのアラビア語星名と同じように、プトレマイオスが『アルマグスト』でつけたギリシア名のアラビア語訳です。